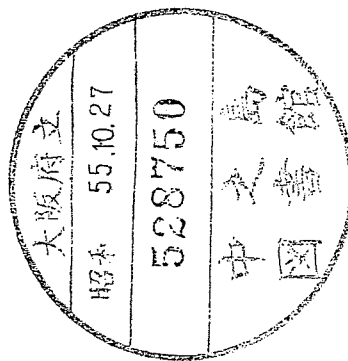
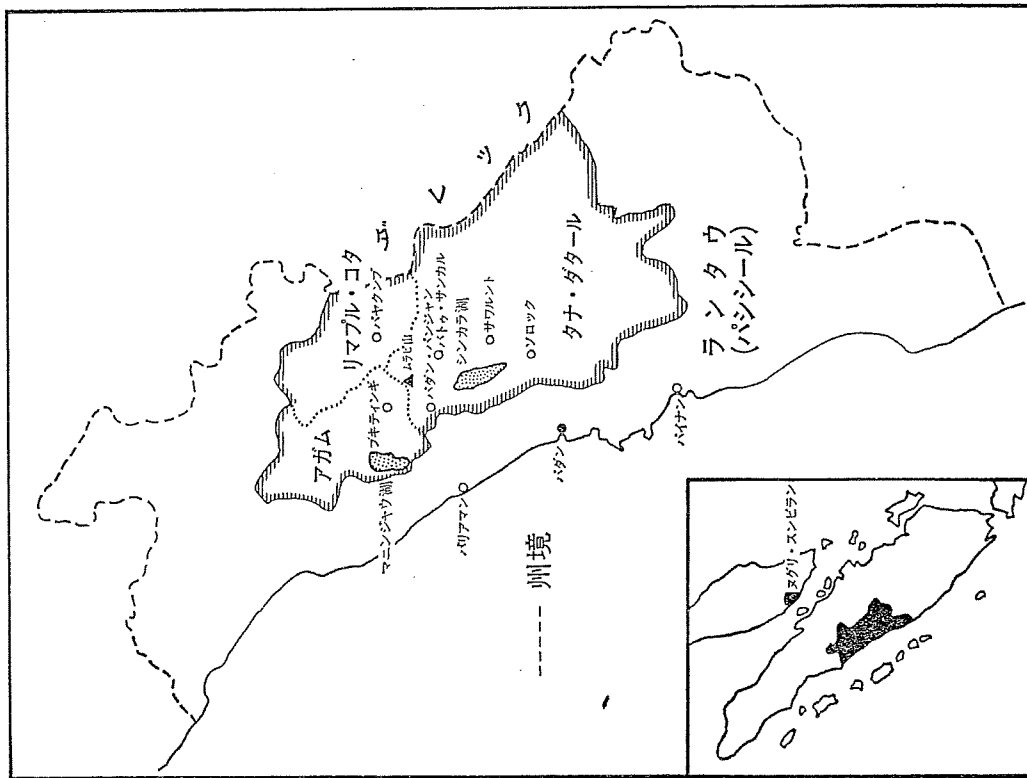


インドネシアの諸民族と文化
タンチャニングラット編―加藤剛・土屋健治・白石隆訳



第二章 ミナソカバウの文化

ウマル・モリス



地図13 ミナンカバウ地域

一 概 観

ミナンカバウ文化圏に属する地域は、マンタウエイ諸島を除く、現在の西スマトラ州にはほぼ相当する。ミナンカバウ人の考えによれば、「ミナンカバウ世界」(ミナンカバウ文化圏)は二つの地域に分けられる。一つはダレック(darek 内陸高地平野部)で、もう一つはパシール(Pasisir 海岸地帯—インド洋沿い海岸地域)またはランタウ(Rantau 「開拓地」)である。パシールに住む人々も、もとをたどれば、その昔ダレックから移り住んだ人の子孫であると信じられている。したがってダレックはミナンカバウ人の発祥の地として、ミナンカバウ文化継承の中心地とみなされる。ダレックはタナ・ダタル、アガム、リマプル・コタの三つの伝統的中心区域(現在の県にはほぼ等しい)に分けられ、時としてソロックがこれに加えられる(地図13参照)。

ミナンカバウ人によれば、その昔ミナンカバウ人の祖先は、もともと西スマトラの内陸部、パリアンガン・パダン・パンジャンに住みついたといわれ、やがてこの地より「ミナンカバウ世界」全体に移り広がっていった。ミナンカバウの伝承も、彼らの祖先の発祥の地をムラビ山(その麓にパリアンガン・パダン・パンジャンがある)と結びつけている。

ミナンカバウ文化の担い手は右に述べたミナンカバウ本来の土地に住んでいる人だけでなく、スマトラの他の地域そしてマレーシアに住む人たちの間にも見られる。例えばミナンカバウ人の移住者は西アチエのムラボト周辺に住んでおり、マレーシアのヌグリ・スンビランには一五世紀以来のミナンカバウ移住者の子孫が住んでいる。もし、ミナンカバウ語が話されている地域にはミナンカバウ人の移住者が住んでいると考えれば、シボルガ、ベンカフル周辺地域も、ミナンカバウ文化圏に入れることができる。いずれにしても、このような人口の地理的分散のため、ミナンカ

バウ人の実数を確認することは難しい。ここでは一応四〇〇万人（西スマトラ州の外に住む人も多くある）という推計値をあげておく。

ミナンカバウ本来の土地から遠く離れた地域にまで移り住んでいく傾向は二つの要因による。まず、現存する土地を利用せずに富を得たいというミナンカバウ男子の望みがあげられる。ミナンカバウ社会にあつては、男は自分の母系家族のために農地を利用できても、自分自身のために利用できない。第二に、村内、家族内、個人間の争いごとに破れた人はしばしば村に留まることを潔しとせず、自分の村、時には家族をも捨てて他の場所に移り住む。これらの要因は最近の社会的発展による他の要因とあいまって、ミナンカバウ人の地理的移動を促進している。

近代政治行政機構が導入される以前、ミナンカバウの地は土着の統一された政治機構を有していたわけではない。伝統的にミナンカバウ人の忠誠心の限界はおおののナガリ (Bagari 村) であり、ミナンカバウ社会全体に向けられていたのではない。例えば A というナガリ出身の人が B というナガリに住むとしても、その人は B 村では依然として「外人」である。

とはいえミナンカバウ人は、マレー語に近い同一の言葉、ミナンカバウ語を話す。言語学的研究によると、ミナンカバウ語は独自の言語と考えることもできるし、またマレー語の一変形と考えることもできる。マレー語の単語は通常、一定の音を変化させることにより、ミナンカバウ語に変えることができる。また、ミナンカバウ語とマレー語には多くの共通単語が見られる。

ミナンカバウ語自身の中にも、いくつかの方言がある。ごく大雑把にいて、ミナンカバウ語圏は、表 18 に見るような「a」地域と「o」地域に分けられる。

方言上の他の違いもあることはあるが、ここで詳述する必要はないであろう。

言語以外に、ミナンカバウ社会に一つの統一性を与えているものに家族制度がある。ミナンカバウ社会は、インド

表18 ミナンカバウ語の「a」方言と「o」方言の比較

マ	レ	一	語	a	地	域	o	地	域
penat (疲れた)	apa (なに)	mana (どこ)	lepas (自由な)	panek a ma lapeh	ponek ano mano lopeh				

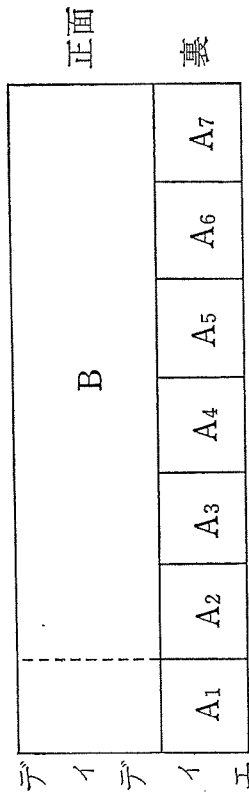
ネシアの中でも文化程度の高い社会の一つであるが、奇妙な家族制度、母系制（これについては後に詳述）を持つことで知られている。ミナンカバウの母系制は、二〇世紀初頭にバレル・プスタカ（オランダ植民地時代の、最初のインドネシア語書物の出版局）により出版されたミナンカバウ社会についての小説を通じ、インドネシア社会に広く知られるようになった。母系制こそは、ミナンカバウ文化に固有性を与える重要な要素の一つである。

二 村の構造

ミナンカバウ語でナガリ (Bagari) と呼ばれる村は、通常「村」と同名のナガリ、およびタラタック (Taratak) と呼ばれる二つの中心地域からなる。ナガリは居住地を中心とする村の核をなす地域で、他方タラタックは森林と畑からなる。もしタラタックに住んでいる人があつたらば、そこにある土地を守り耕している人で、普通その土地の所有者ではない。

ナガリ地域には通常モスク、集会所、そして週に一、二回開かれる市場がある。モスク、慣習法に関する協議が行なわれる集会所、市場、またオランダ植民地政庁によって導入された「村役場」は、村の生活の中心をなす場所で、村のだいたい中央にあり、左右に村の家々を眺められるような場所に位置している。ナガリ地域はまた、水田地帯をも含む。畑はナガリ地域には含まれず、タラタック地域に含まれるが、後者には水田もしばしば見られる。このような土地区分は、タラタックがナガリ地域の周辺地区を形成するものだという性格から納得できよう。村の住民の多くはナガリ地域に住み、時々タラタックへ行くだけである。

図6 ルマ・ガダンの間取り



A 寝室
B 広間

階段は通常A4の正面にある。台所が家の裏に付いている場合には、A4には寝室のかわりにわたり廊下がある。アンジュンA1とA7の横に作られる。

住居について見ると、タラタックにある家はミナンカバウ独特の伝統的な家屋と呼ぶことはできず、それを見るためには、ナガリ地域にある家に眼を向けなければならない。タラタックにある家は、一時的な住居か、あるいは伝統的家屋を建てる経済力のない人の家である。

ミナンカバウの伝統的家屋 (Rumah gadang ルマ・ガダン) は、今では新しく建てる人がないので、近い将来消滅するのではないかと思われる。ミナンカバウの伝統的家屋は高床式で、正面から見て横に長く伸び、その大きさは柱と柱の距離である間口 (Ruang ルアン) の数で数える。一軒の家のルアンの数は奇数で、最低三つから始まり、通常は七つで、中には一七もルアンのある家がたまにある。家の奥ゆきは二つの部分に分けられ、後方半分は壁でいくつにも仕切られて寝室に使われる。家の女性成員はこの部屋で夫を迎える。寝室は女性のための特別な部屋で私的なものである。家の正面部分は仕切りのない広間で、ここでお客を接待し、あるいは祝宴等の集いが持たれる (図6参照)。

ルマ・ガダン (伝統的家屋) には、アンジュン (Anjung) と呼ばれる場所が一方の隅にもうけられていることがある。この場所は他の部屋よりも床が少し高くしつらえてあり、他の場所と比べて一段高い特別な場所と考えられている。アンジュンのあるルマ・ガダンは、村の住民の中でも村に最初に定住した人の子孫といった由緒のある家である場合が多い。

ルマ・ガダンには通常一つしか入口がなく、これは家の正面の真ん中に置かれている。獣の多い地方では台所はルマ・ガダンの裏に建ててあることが多く、家と台所は渡り廊下のようなものでつながれている。台所にも時として別に入口が付いているが、これは女性専用である。

ルマ・ガダンは大きな木の柱によって支えられているが、柱の高さは家の高さと同じで、その数は多い。ルマ・ガダンの縦幅 (Lebar デイテイエ) にはルアンの間隔ごとに四つの柱が並べてあるので、ルアン (間口) が七つあるルマ・ガダン (七十一デイトイエ——図6参照) には合計で三十一の柱があることになる。

屋根近くの空間にはバグと呼ばれる屋根裏のようなものがあって、日常あまり使わない品物を保管するのに利用される。ルマ・ガダンの屋根は、正面から見るとちやうど船のように見える。屋根は本来サトウ椰子の葉で葺くのであるが、この頃ではトタンを使用している例が多い。

最近建てられる家は伝統的なミナンカバウの家屋形式を継承することは珍しく、現在インドネシア一般に見られるような家の形と変わらない。ただし高床式の建築様式、および寝室とそうでない部屋の区別はまだ守られている場合が多い。

三 経 済 活 動

ミナンカバウ人の多くは農業から生活の糧を得ている。地味が豊かで水も豊富な地域ではほとんどの人が水田を耕作しているが、高地肥沃地帯では商業用のキャベツ、トマト等の野菜も栽培している。また土地がそれほど豊かでない地域では、多くの人がバナナ、キャッサバ等を栽培している。この三種類の農業形態は、実際には明確に区別されているわけではなく、とりまぜて行なわれている場合が多い。海岸地帯の農産物としては、椰子が重要である。海岸

および湖に近い地域では、農業以外に漁業が通常副業として行なわれている。

ミナンカバウ人は農業を離れて他の職種を選ぶ傾向があるが、その理由としていくつかの要因が考えられる。それは、農業で生活していけるだけの十分な土地がないこと、農業に従事しているかぎり金持ちになれないという意識があること等である。このような場合、商業の世界に転じるか、またはある程度の教育を受けていれば、給料取り(役人、事務職)になる。商業に従事する人たちは、織物、日常小間物品、食糧関係の三つの職種から仕事を選ぶことが多い。

このほかには手工芸で生活する人もいる。広く知られているものとしては、プキティンギ近くにあるコト・ガダンの銀細工、サワルト近くのシルンカンの刺繍織りがある。他の手工芸品は主に西スマトラ州内部においてのみ知られているもので、残念ながら手工芸の将来は一般に明るくない。シルンカンの刺繍織りは消滅しつつあり、マレーシアの同種の企業よりも進展がなく、今では旅行者目当ての仕事になっている。マレーシアでは状況が異なり、インドネシアの女性がジャワ更紗を使うのと同じように刺繍織りはまだ一般に使われている。

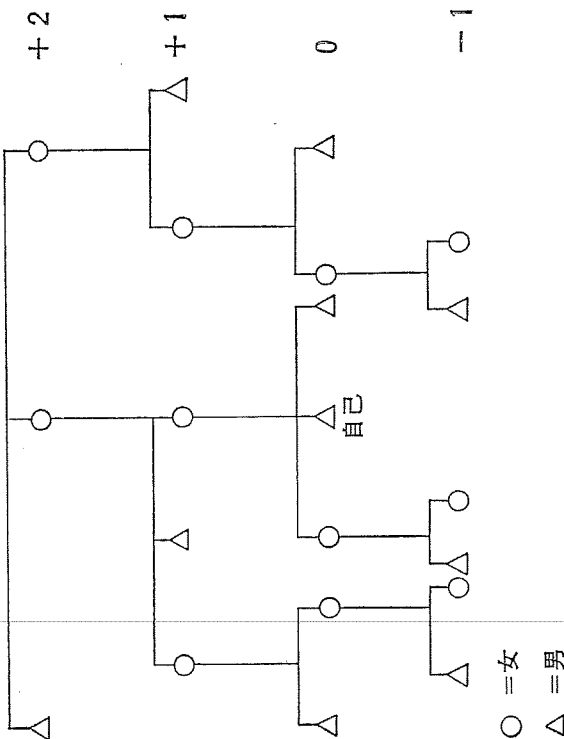
小工業もあまり発達しておらず、あるものといえばシルンカンや、バヤクンブ近くのクベンに見る織物工業だけである。

ミナンカバウ地域の商業活動のうち、ほんの一部が外国人の手になり、ほとんどすべての商業分野における活動はミナンカバウ人自身の手の中にあるといつてよい。華人の支配する分野は、洗濯業等、ごく限られている。

四 親 族 制 度

ミナンカバウ社会にあつては、血縁は母方を通してたどる。したがって、ミナンカバウ人は父親ではなく母親の親

図7 ミナンカバウ社会における母系親族集団の構成員



族集団に属するのであり、父親は妻と子の属する親族集団の外に存在する。ミナンカバウ社会では、一つの母系親属集団の構成員は、男性を中心にして二世代上、一世代下まで数えた場合、図7のようになる。

ミナンカバウ社会では、男親は、女親と子供とは別の親族集団に属し、このため核家族という単位はミナンカバウの家族制度にあつては明確な地位を持たない。核家族は、単に男女の結合による家系の永続化のためだけでなく、子供の教育や将来のためにも重要な役割を果たすが、しかしそれ独自の地歩を持たないといつてよい。

母系制における最小親族単位はパルイック (pa. 己語 母系小集団) で、一部の地域ではスク (suku 母系氏族) とパルイックの中間にあるものとして、カンブン (Kampung 母系集団) の存在するところもある。この三つの親族集団のうち、パルイックは真の血縁単位をなすものである。

親族集団の利益はニニック・ママック (niniak

mamak) と呼ばれる男性によって守られる。ママック (mamak) という言葉自身は母親の兄弟を指す。親族の利益を守るのはママックの肩にかかっているが、しかしこれは、ママックより年をとった世代がその責任から解放されていることを意味しない。これらの年をとった世代をも含めた総称としてニニック・ママックという言葉が使われるのであって、時々この言葉は単にママックと短くして使われることもある。

スクは母系氏族と考えられるもので、原則的には自分のスクの外から結婚の相手を探さなければならない。しかし地域によっては、同じスクでも違ったカンブンであるかぎり結婚が許されるところもある。おそらく昔は、すべての地域でスク外婚が実施されていたのであろう。

かつて男は、できるかぎり自分のママックの娘あるいはそれと同列・同世代の娘と結婚するのが慣習であった。この一変形として、父親のメイ (父親の姉妹の娘) と結婚する形も後にあらわれた。この他には自分の姉妹の夫の姉妹と結婚することも可能であった。しかしこのような結婚形態は現在では少なくなっており、昔の村内婚規制 (同じ村の人間と結婚することを課せられる) も、現代的風潮の影響もあつてあまり厳しく守られておらず、結婚相手の選択の範囲はますます広がっている。

ママックの娘と結婚する形態は、姑とママックの妻の呼称が同じであることからかんがみて、おそらくミナンカバウ固有のものであったと考えられる。即ち、男子は自分のママックの妻を、たとえママックの娘と結婚していなくてもミントウオ (義理の母) と呼ぶ。またママックの娘との結婚は、ママック自身が結婚話を進められる立場に在るので、最も簡単に手筈を整えることができる。

ミナンカバウ社会では、結婚にあつて花婿から花嫁の家族に対し婚資を与えることはない。イスラム教によると、花婿は花嫁になんらかの贈り物をするのが義務つけられているが、これはミナンカバウ社会では一般的でない。いくつかの地域では、逆に花嫁の側より花婿の側に、娘と結婚してくれるよう、なにがしかの現金あるいは品物を与え

る習慣があり、これは「求婚金」(uang jemputan ウアン・ジユムプタン) と呼ばれる。なにはともあれ、ミナンカバウの結婚で一番大切なことは、花嫁、花婿が両親族の象徴となるような物 (短剣、指輪等) を交換することである。

花嫁の家での婚儀が終わったのち、花婿は花嫁の家で生活する。昔は、夫は夜だけ妻をその家に訪ねたものであった。離婚が起きた時は、夫は妻の家を去らねばならず、子供たちは妻の家に残った。

ミナンカバウ社会は一夫一婦制ではなく、特に特定の社会層の人は、時には一人以上の妻を持つことがあり、この習慣は若い世代の攻撃的となっている。

先にバルイック (母系小集団)、カンブン (母系集団)、スク (母系氏族) の三つの母系集団があることを述べた。このうちスクとカンブンは正規の長をいただく集団で、スクにはプンフル・スク (penghulu suku)、カンブンにはプンフル・アンディコ (penghulu andiko、あるいは datuak kampueng ダトック・カンブン) と呼ばれる母系親族の長がいる。スクとカンブンはミナンカバウの社会構造と関係があるので、その項でまた論ずることとする。

結婚式あるいは母系親族集団に係わる他の行事に関連して、いくつかの親族集団は相互依存関係にある。バルイックないしカンブンの成員にとって、自己の集団に属する女性と結婚した男性はウラン・スマンドと呼ばれ、また女婚の女性親族はバスマンダンと呼ばれる。子供にとって父親の親族はバコ (いくつかの地方ではインドック・バコ) であり、他方母系集団の男子構成員の子供はアナック・ピサンと呼ばれる。

これらの集団はきわめて重要である。例えばバコの親族の間で死者が出た時は、アナック・ピサンは労力を貸さなければならず、また妻たるものは、バスマンダンの家でお祝いごとがある時は台所の仕事を手助けにいかねばならない。

五 社会構造

バルイック、カンブン、スクといった母系親族集団以外に、ミナンカバウ社会には慣習法にのっとり他の集団は存在しない。このため政府の指令、規約、村政府の行政活動も、これらの親族集団の長であるブンフル・スク、ブンフル・アンティエを通して村人に伝えられる。

スクには、指導者としてのブンフル・スクのほかドクバラン、マンタイと呼ばれる補佐役がいる。ドクバランはスク成員の安寧を守り、マンタイはブンフル・スクの書記のような存在である。カンブンという単位はすべてのミナンカバウの村に存在するわけではなく、ここでは特にとりあげる必要はない。

いくつかの村では、ブンフル・スクは、その候補者になれる人はある一定のスクの成員に限られてはいるが、合議によって選出される。他方、ある特定スク内の一つの家系の人のみがブンフル・スクになる権利を持つと決めている村もある。後者にあつては、ブンフル・スクの家系が絶えた場合に初めて選出権利が他の家系に移行する。この選出方法の違いは、村の中の階層構造の厳しさの違いにかかわっている。

社会階層構造に関していえば、三種類の階層制度が一般に見られる。バダン、バリアマンといったいくつかの地域にあつては、社会階層制度は、社会生活全般に影響を与えている。そこでは社会の中で真に高い地位を持つ貴族層があり、その男性は特別の扱いを受ける。貴族の男性が結婚した場合、妻の生活の面倒をみる必要がなく、逆に結婚に際し、「求婚金」として花嫁側から金銭を受けとる場合さえある。というのも、この結婚によって妻の親族はその社会的地位を高めることができるからで、子供の社会的地位は母のそれよりも高くなる。例えばバリアマンの「王」(ラジャ)が平民の娘と結婚した場合、この結婚から生まれた子供は、バギンド(ラジャの次の尊称)といった特別

の尊称を使うことができる。

他の地域でも右のような性格の社会階層制が存在するが、しかしその影響力は結婚時を除いてあまり顕著でない。このような地域では貴族階層に属する女性は平民の男性との結婚を禁止されており、特に最下層の男性との結婚は厳禁されている。貴族の男性が平民の女性と結婚した場合、後者の親族の社会的地位は徐々に上がるかもしれないが、これとても最下層の女性の親族にあつては、たとえ花婿が貴族の出身であっても、社会的地位の向上は起こらない。

他の地域にあつては、この種の貴族、平民の区別はもはや明確でなく、その存在を即座に見極めるのも難しいほどで、社会階層制度の存在自体が認め難い。

ミナンカバウ社会における社会階層制度は、一つの村あるいは隣接する村落群の中においてのみ通用する制度で、ごく大雑把にいて一般に(1)貴族(メンサワン)、(2)一般人(オラン・ビアサ)、(3)最下層民の三つの階層が見られる。最後の階層は軽い意味での奴隷と同じようなものである。

階層間の地位の違いは、村の歴史においてどれだけ古くから定住しているかということと関係している。村に一番早く定住した人の子孫が貴族層に属し、これらの人はウラン・アサ(Engai asa 「始めからの人」といわれる。後に村にやってきた人で、第一のグループに従属せず、自分で土地を買って定着した人たちは、平民あるいは中間層に属する。後に村にやってきた人のうち、第一のグループに従属し、その召使いとなることにより村に定着した人々は、第二のグループと区別され、社会の最下層を占める。

ミナンカバウ人の概念によると、右のような階層間の差は、特にウラン・アサの視点から見た場合、次のような範疇によって区別される。

- (1) バルイックの絆によるクマナカン (kemanakan 男にとって自己の姉妹の子供あるいはそれと同列・同世代の親族)

(2) ブデイ (徳) の絆によるクマナカン

(3) 金の絆によるクマナカン

(4) 膝の下の (身分の低い) クマナカン

パルイックの絆によるクマナカンとは、ウラン・アサの直接の子孫たちである。徳の絆によるクマナカンとは、村に後にやってきた人々の子孫であるが、もとの村での地位が高く、新しい村で広い土地を「買う」財力があつたゆえに階層的にはウラン・アサと同列とみなされている人々である。金の絆によるクマナカンとは、村に新しく来た人で、ウラン・アサと疑似親族関係を結んだ人たちであるが、彼らの生活はウラン・アサの慈悲に依存するものではない。膝の下のクマナカンはウラン・アサと従属関係にあり、ウラン・アサの家で家事手伝いをする以外に生活の途を持たない。

右のような伝統的階層制度は、近年とみにあいまいになっている。先に見たように、昔の階層制度は土地利用と関係していたが、農地は多くの収入をもたらすような商業作物のためにあまり使われていたわけではなく、そのため土地から得られる自給のための作物収穫量は、母系親族の成員が多くなればなるほど相対的に減少する。したがって土地より生業を得ている人は、時間がたち人口が増加するにつれて貧しくなる。

一方、土地を多く持たない社会階層では、これと逆のことが起こった。これらの人は土地に束縛されることなく、他の生業即ち商業の道に活路を見出し、富を得たため、社会的地位も結果的に向上した。この社会的上昇は貴族層の地位の低下とあいまって、昔と違ふ事態を階層制度にもたらすことになる。

さらに、オランダ植民地官僚機構における政府官吏への道が開けたのも、新しいエリート集団が西スマトラに誕生した。この集団の誕生も、ミナンカバウ社会の伝統的階層制度に影響を与えた。

ここで伝統的ミナンカバウ社会におけるリーダーシップの問題を見てみよう。伝統的ミナンカバウ社会には、一つ

の明確なリーダーシップの形を発見するのは難しい。例えば一つのパルイックで誰が指導者となるかを予測するのは不可能に近く、すべての成人男子は指導者となる権利を持つとも持たないともいえる。一人の人の命令あるいは提言にある人々が従うのは、その人の個人的声望によるかもしれない。一方、他の人々が同一人の命令、提言に従うのは、その人が尊敬されているから、あるいはその人の富、能力、または勇気、たまたまもっている権力のためであるかもしれない。

ブンフル・スク (母系氏族の長)、ブンフル・アンデイヨ (母系集団の長) ともに、実質的な権力を持っているわけではない。むしろこれらの人々は母系集団の「長老」として物事を遂行する役目を持つ人と考えられている場合が多い。ブンフルになるということは、権力を得るよりはどちらかという義務を背負う意味合いの方が強い。ブンフルの地位が、オランダ植民地時代そして今日のように政府機構と結びつく時、そこに初めて権力が生じる。したがって、ミナンカバウの小説には人々がブンフルを恐れているように書かれているが、これはオランダ植民地政庁下の行政機構との関係で初めて理解できるのである。

物事の遂行にあたっては頭から権力で押しつけるのではなく、種々の説得力に訴える必要がある。ミナンカバウ社会のリーダーシップは、きわめてプラグマティックでなければならない。

伝統的には、ミナンカバウの政治形態はボデイ・チャナゴ (Bodi Caniago) とコト・ピリアン (Koto Piliang) の二つの制度に区別される。ボデイ・チャナゴはダトゥック・パラパテイック・ナン・サバタン (Datuek Parapatiek Nan Sabatang)、コト・ピリアンはダトゥック・カトゥムンガン (Datuek Katumengungan) という二人の人物によってそれぞれ打ち立てられた。大雑把にいうと、最初の制度はより民主的であり、二番目の制度はより専制的であるといつてよい。ボデイ・チャナゴ制度では合議の役目が重要視されるが、コト・ピリアン制度では合議は重要でない。また後者では一つの家系の人のみがブンフルになる権利があり、ブンフルは選出によって任命されるのではな

い。コト・ピリアン制度に属する村の集会所は、建物の両端が真ん中よりも高くしてあるが、ボデイ・チャナゴの村にあっては集会所の床はすべて同じ高さである。しかしこのような両制度の違いは、今日ではあいまいになってきている。

母方を通しての血縁の継承、結婚後の妻方居住とともに、他の母系制の特徴がミナンカバウ社会には見られる。世襲財産（母系親族の共同財産）も母方を通して相続され、財産相続の権利は女性に属する。母系集団の男子成員は世襲財産を相続する権利はなく、むしろ財産がなくならず真に母系成員のために利用されるよう監視する義務を負う。

一〇世紀に入り他の社会や文化との接触が深まり、個人財産が出現して量的に増加するとともに、個人財産の相続はミナンカバウ慣習法における一大問題となり、子供とクマナカン（男にとって自己の姉妹の子供）の間に紛争が起こるようになった。代々階襲されてきた世襲財産の相続方法を固持するクマナカンは、個人財産も子供にはなくクマナカンに与えられるべきだと主張した。父（夫）と苦楽を共にしてきた子供と妻は、この主張に満足せず、クマナカンの主張はイスラム法に違反すると説いた。この問題は現在、次のように解決されることが多い。——大部分の人は、個人財産に関するかぎりイスラム法に従う。一方クマナカンの安寧と幸せを願う人々は、自分の子供がなるべくクマナカンと結婚し、結果的に個人財産の恩恵にも浴せるよう努力を払う。

結婚もしばしば慣習法によって問題にされる事柄である。特にこれは禁忌とみなされる結婚の範囲に関してで、例えば同じ母系集団の間同士は結婚できない。いくらそのような結婚を行ないたいと希望しても、村の中での実行はおそらく不可能であろう。また村内婚の習慣が厳しく守られている村では、他村の男と結婚する女は村から追放される。しかし男が他村の女と結婚する場合はこのようなことはなく、せいぜい同じパルイック（母系小集団）の成員から白眼視されるぐらいである。

六 宗 教

もしイスラム教信者でないミナンカバウ人がいるとしたらこれは驚くに値する珍事で、たとえ多くの人は教義を実行しない名目的なイスラム教徒であるとしても、すべてのミナンカバウ人はイスラム教徒であるといつてよいであろう。通常ミナンカバウ人は、イスラム教によって説かれる教義以外に耳を傾けないといつてよく、イスラム教によって教えられる神だけを信じている。とはいえないに特別な事情が起こると、イスラム教によって教えられている以外のことも信じる人が多い。例えば災害や病気をもたらす悪霊の存在を多くの人は信じているし、悪霊退散のためには呪術師を訪れる。これと関連して、ある特別な神秘的な魔力を持つ人の存在を多くの人は信じている。例えば離れていても赤ん坊の頭のテッペンから血を吸うことのできる女（ブンテイヤナック）や、遠くから空気を通して毒を飲ませる（ムンガシ）というように、神秘的な力によって人に危害を加える能力を持つ人の存在を信じている。

ミナンカバウ社会には、今日特別注目し値するような宗教的儀礼は見られない。一般に、重要な宗教的行事はイスラム教の教義にのっとりたもので、断食月の断食あけのお祈りやメッカへの巡礼があげられる。昔は、タブイック（*tabuik*）、キタン（*kitan*）、カタム（*katam*）、ムンガシ・コトラン（*mengaji Koran*）、死者の法要といった重要な宗教的行事も存在した。

タブイックは以前パリアマン、パダン等の海岸地帯に見られ、カラベラ平野でのハッサン（*Hasan*）とアセイ（*Haji*）の死を追悼するためのものである。キタン（²割礼）とカタム、ムンガシ・コトラン（共にコトランの唱詠の授業を終えること）の儀式は、ミナンカバウのいくつかの地方で行なわれるが、これはトルン・タナあるいはトルン・マンデイ（赤ん坊を初めて地面にさわらせまた水浴させる）やクカ（赤ん坊の髪を初めて切る）の儀式のよ

うに、個人の通過儀礼と関係のあるものである。

昔は死者の冥福を祈る「法要」もあった。死者の埋葬後七日間、人々は死者の冥福を祈るため集まった。さらに死後四〇日、一〇〇日、一〇〇〇日目にも同様の集いが持たれた。この行事は、現在ではほとんど忘れさられてしまったといつてよい。

ミナンカバウ社会には、スク(母系氏族)のレベルでマンタイと呼ばれる慣習法上の宗教的(イスラム教)役職が存在する。マンタイは、イスラム教の知識ゆえではなく、スクの家系によって選ばれる。

村内の宗教的役職としては、アング・カリ(angka keli)ないしカダイ(kadi)がある。イスラム教にのっとり人々を結婚させるという主要任務のほか、アング・カリまたはカダイは時にはモスクを管理し、必要とあれば金曜の礼拝を指導し、説教をする。

いくつかの地域では、ジャワのアサントレン(イスラム塾)のように、宗教学校として機能するスラウがまだ存在する。そこでの宗教学習は、ジャワのキアイと同様のトウアングあるいはシェフ(イスラムに造詣の深い師)の指導のもとに行なわれる。この人々は、単にコーランの斉唱を教えるだけでなく、しばしば神秘主義的教えの指導もする。昔は、シェフたるものは教え子、村の住人、その付近の村々に強い権力を持ち、聖人ときまでみなされることもあったが、このような状態はすでに過去のものとなりつつある。

七 一九世紀以降のミナンカバウ社会の変容

古い考え方と新しい考え方の抗争は、ミナンカバウ社会では古くから見られる現象である。一九世紀はじめのパトリ戦争は、初期の、進歩派と守旧派の抗争がやがて政治的問題に発展したものであった。進歩派は、当時ミナンカバ

ウ社会で守られていたイスラム教は土着の風俗・習慣との妥協の産物であり、イスラム教にとって真に大切な本質を喪失してしまったと考えた。彼らは「宗教改革」の道を通してイスラム教を浄化しようと務め、これが守旧派からの反発をひきおこすことになったのである。

右の守旧派と進歩派の抗争は二〇世紀にも継承されたが、この過程で守旧派は徐々に追いつめられる結果となる。進歩派は、積極的に従来の宗教教育制度を近代化し、生徒たちは宗教問題だけでなく、一般知識も学ぶことになった。宗教は単に黙従するものではなく、論議をしてもいい対象となったのである。

宗教上の変革は、ミナンカバウ社会全体に影響を与えるものであった。イスラム進歩派の戦い、そして近代化による他の社会変容の結果として、子供は父親の個人財産を相続することができるようになった。また村内婚の習慣もともにその規制力が弱くなっている。

改革運動を契機として、ミナンカバウ社会の人々の間にはイスラム教義に関する造詣が深まったが、それは、ミナンカバウ人の間にミナンカバウであることよりはイスラム教徒であることをより重要視する意識を生み出し、多くの人がミナンカバウの「奇妙な」慣習に眼を向けるようになった。ミナンカバウの慣習においては父親の地位は定かでないが、イスラム教は、自分の家族(妻と子)を監督する権利をはっきりと父親に与えている。またイスラム教によると、父、母、兄弟、姉妹、異母兄弟・姉妹、異父兄弟・姉妹等の特定の人々を除いて、イスラム教徒となら誰でも結婚できるが、ミナンカバウの制度では結婚の選択範囲はもっと限定されている。たとえ結婚したい相手がイスラムの教えによって認められている人であっても、同一母系氏族の出身である、あるいは他村の出身である、また社会階層の違いがある等の理由で、ミナンカバウ慣習法によると結婚できない場合もありうる。このような状態は、ミナンカバウ社会を背景として一九二〇年代、一九三〇年代に書かれた小説に見るように、ミナンカバウの慣習法に対する疑問を醸し出すこととなった。

そして西洋文化一般によって持ちこまれた西洋文物との接触は、ミナンカバウ慣習法に対する攻撃をさらに激しいものとした。オランダ教育の一つの特徴はオランダ系の学校が都市に集中していたことで、オランダ系の学校に通うため都市に出たミナンカバウ人は、伝統的な生活環境から解放されることになった。ミナンカバウ社会はきわめて独立性の高い村々からなっており、慣習法の規制も各村の境界の中でのみ執り行なわれた。したがって同じミナンカバウ人でも、他村の人間は慣習法上「外国人」とみなされたのである。オランダ教育を受けるため都市に出た人々は、このような村中心の伝統的環境の外に身を置いたことになる。都市、特に西スマトラ州外の都市に長くいれればほど、自己の生活に対する伝統的規制は弱くなっていった。このようにして、彼らは慣習法は現代社会と適合しないと考え、ミナンカバウ慣習法の批判を始めるようになる。このような過程は、世代間の葛藤をテーマとした一九二〇年代、一九三〇年代に書かれた、ミナンカバウの小説によく表われている。

近代化の問題はミナンカバウ社会にとって新しい問題ではなく、また近代化の一側面としての教育の向上は、すでに以前からミナンカバウ社会では努力が払われている事柄である。インドネシアの他の地域における同じように、教育の向上への努力は、住民の都市志向をもたらし、ミナンカバウの場合ムラントウ（地理的移動、出稼ぎ）という現象を促進させている。多くのミナンカバウ男子は、ジャワ、特にジャカルタに定住するため西スマトラ州をあとにする。この人口流出は、ミナンカバウ地域の開発を考える時深刻な問題である。

八 近代化をめぐる諸問題

今日まで最も成功をおさめた社会発展の分野は、教育である。この発展の跡は、西スマトラ州内の学校数そして卒業生の数にも反映されている。しかしこの発展も否定的な側面を持っている。即ち卒業生および中途退学者の失業の

問題である。失業している若い人たちが自身の問題点としては、次の三つが考えられる。第一に、彼らは月給とりの仕事（役人、事務職）に就くことを望むが、この種の仕事の数はきわめて限られている。第二に、村に帰って農民になろうと欲する人が少ない。農民の仕事は低級であるという考えのほか、農業では収入が少なく自分の望むような生活ができないと考えている人が多い。第三に、たとえ農業以外の分野で自分で仕事を始めたいと思っている人がいても、ほとんどの場合仕事を始める資本を持っていない。教育を受けた人は、往々にして仕事を始めた当初に氾める辛酸を飲んで経験しようという意志も勇気も持たない。

右と同じようなことは、いまだに「離陸」しない西スマトラ州の経済発展についてもいえる。多くのミナンカバウ人の成功者がいることによっても証明されるように、ミナンカバウ人は自立心が旺盛である。しかしミナンカバウ人の成功例は商業の分野に限られており、最初に比較的大きな資本投資を必要とする産業や工業分野では、目立った成功例を聞かない。ひるがえってこれはミナンカバウだけの問題ではなく、広くインドネシア全体が直面している問題でもある。（加藤剛訳）

原 註

- (1) ミナンカバウ人と社会を説くにあたって、他のインドネシア民族の場合も同じであるように、われわれはすでに長いこと進行している社会変容、そしてそれによるミナンカバウ社会の等質性の減小を無視することはできない。本来のミナンカバウの文化要素には、昔から外来要素が多く入りこんでいる。本章を読むにあたって、読者はこのようなミナンカバウにおける社会変容を念頭に置く必要がある。

主要参考文献

- Bachtiar, Harsja W.
 1967 "Negeri Taram: A Minangkabau Village Community." *Villages in Indonesia*. Edited by Koentjaraningrat. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.
- Datuk Maruhun Batuah, A. M. dan D. H. B. Tanameh
 n.d. *Hukum Adat dan Adat Minangkabau*. Jakarta: Balai Pustaka.
- Dt. Sangguno Diradjo
 1919 *Kitab Curai Papan Adat Lembaga Alam Minangkabau*. Fort de Kock: Snelpersdrukkerij "Agam."
- n.d. *Tambo Adat Alam Minangkabau*. Jakarta.
- Josselin de Jong, P. E. de
 1952 *Minangkabau and Negri Sembilan: Socio-political Structure in Indonesia*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Joustra, M.
 1923 *Minangkabau*. 's Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- Junus, U.
 1964 "Some Remarks on Minangkabau Social Structure." *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, CXX, 293-326.
- Maretin, J. V.
 1961 "Disappearance of Matriclan Survivals in Minangkabau Family and Marriage Relations." *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, CXVII, 168-195.
- Westenenk, L. C.
 1918 *De Minangkabausche Nagari*. Weltevreden: Visser.

訳註

- 《1》一九二〇年代から一九三〇年代にかけて、ベン・ブスタカを中心として「大量出版」に支えられたインドネシア最初の小説家たちが誕生した。「ベン・ブスタカ時代」の小説家群には、多くのミナカバウ出身者が見られる——マラ・ルスリ (Marah Rusli)、アブドゥル・ミス (Abdel Meis)、アディネゴロ (Adinegoro)、N・スータン・イスカンドール (N. St. Iskandar)、ハムカ (Hamka または H. A. M. Amrullah)、M・エンリ (M. Enri)。彼らが好んで取り上げた小説の題材は、ミナカバウの母系制を中心とした伝統的な要素と近代的な要素の葛藤である。
- 《2》ハッサンとフセインは共に預言者マホメットの孫で、戦いの中で死んだ両者の死を悼み、イスラム教の宗派によってはお祭りが催される。

インドネシアの諸民族と文化
定価 三五〇〇円
初版印刷 一九八〇年八月三〇日
初版発行 一九八〇年八月三〇日
編者 クンチャラニングラット
訳者 加藤剛
土屋健治 } ©
白石隆 }
発行者 桑原農
発行 株式会社めこん
東京都文京区本郷 一一二五一一
発売 株式会社文遊社
東京都文京区本郷 一一二五一一
印刷 秀和協進社・東光印刷所
製本 東文堂製本所

ISBN4—89562—301—7 C3039